『ある無名兵士の従軍日記』　　2025 年 10 月 13 日

山口武夫氏は 1917 年群馬県伊勢崎市に生まれ、20 歳の時、徴兵検査を受け、甲種合格した。以来、中国、東南アジア、沖縄と 8 年にわたり、一兵士として従軍し、沖縄の宮古島で敗戦を迎え、帰郷した。軍は機密保持のため、戦場の状況を兵士に書くことを禁じていたが、山口氏は戦時中の出来事を 4 冊の従軍日誌に正確に書き遺していた。敗戦後 20 年過ぎてから、従軍日誌を見ながら、記憶を辿って、戦場の実情を、「思い出の記」と題する膨大な日記を残していた。山口氏は、過去の出来事を調べ、記述することに優れた才能を持っていて、従軍中の出来事を、上から目線ではなく、無名兵士の見たまま、経験したままを余すところなく書いていた。息子の通喜氏が、その日記を見つけて、「東京新聞」の記者・小松田健一氏と二人で、読み解いて本書にまとめた。「あとがき」を書いた小松田氏は、本書は、南京虐殺はなかったとか、アジアを欧米の植民地支配から解放する聖戦であったなどという「歴史修正主義」に抗う重要な記録であると評している。

山口氏は高崎で 2 年間の訓練を受け、1939 年に軍曹となり、盛大な見送りを受け、「国家のために尽くす」という覚悟で中国に出征する。山西省太原に侵攻し、3 つのことを経験する。①便衣兵の処刑に立ち会う。便衣兵とは私服を着て、民間人を装った兵士のことで、その便衣兵たちを捕らえた。日記には、「銃剣で刺すと、皆しなってしまうのには驚いた。せんなく銃殺した」と書いている。捕虜として扱わず、裁判にかけることもなく、殺害した訳である。②中国軍と対峙した最前線で、日夜、銃声が鳴り響く。中国軍に攻撃され、多くの戦死者が出た。山口氏が信頼していた部下が側にいて、銃弾を受け即死した。③1941 年 10 月、陸軍大臣である東条英機が首相の座に就いた時、山口氏は「東条首相の現役での就任はどうしても私には解らない。どういう意味でありますか」と問うと、部隊長は「下士官の分際で国の政治に嘴を入れる気か」と怒鳴られた。軍人勅諭を毛筆で筆写せよと命じられ、以来、事ある毎に、嫌がらせを受け昇進はなくなった。1942 年、中国から南方に派兵され、インドネシアのスマトラ島に到着する。米英軍との戦闘より、赤痢などの感染症が最大の敵であった。戦死者数と戦病死数が同率という状態であった。日本軍は医療支援が遅れていたのである。スマトラ島では、錦蛇、大トカゲ、虎、野象の大群などとも格闘した。3 年に及ぶ軍務を終え、1942 年 10 月に帰還する。戦況は厳しくなり、アッツ島で敗北し「玉砕」という言葉が使われた。山口氏は、同年 11 月に、再招集令を受け、中国の牡丹江市に送られる。マイナス 30 度まで下がる極寒の地で、日記には「行軍中特に警戒しなければならないのは凍傷患者の続出で、内地と異なり、一度凍傷にかかるとその局所が腐ってしまうことである」と書いている。ここで、ようやく曹長に任じられた。行方不明になった兵士の捜索のため山狩りを行い、無事に生還した事件、また、迫撃砲の演習をしていた際、平原の枯草に引火して、消火できないような大火事も経験した。山口氏は、中国から沖縄に移動させられる。制海権を奪われ、潜水艦による攻撃を受け、南方への航海は危険に晒されていた。1944 年 10 月、目的地沖縄の伊良部村に着任した。伊良部村から丸太舟で宮古島に移動するが、宮古諸島は米軍の激しい艦砲射撃と空爆を受けた。また、空腹に喘ぎ、人格が変容するのを見る。敗戦を迎え、捕虜になることを恐れ、自死も考えたが、3 ヶ月間の捕虜生活を送る。1945 年 12 月、米船で浦賀に上陸する。帰郷すると、母が「武かやあ、よくけえってきたな」と、涙を流して迎えられる。8 年に及ぶ従軍記は淡々と記されているが、死の恐怖に晒される兵士たちの苦労が浮かび上がってくる。無名の兵士たちが無謀な国策により、大きな犠牲を負う戦争であった。